

【原 著】

小学生の読書活動と学校生活スキルとの関連

邑上 夏美 安藤 美華代

A study on the association between reading activities and life skills at school among elementary school children

Natsumi MURAKAMI, Mikayo ANDO

2020

岡山大学教師教育開発センター紀要 第10号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education and Development, Okayama University, Vol.10, March 2020

小学生の読書活動と学校生活スキルとの関連

邑上 夏美※1 安藤 美華代※2

児童生徒の問題行動の増加の背景には、日常生活に求められるスキルの低下が一つの原因と考えられている。本研究では、学校生活スキルに着目し、読書活動や読み聞かせを受ける体験との関連について検討することを通して、学校において読書活動の時間を設ける必要性について検討した。また、学校図書への知見を得るため、児童の興味・関心のあるジャンルについても検討した。小学校5, 6年生728名を対象に、質問紙調査を行った。その結果、いずれの学校生活スキルにおいても、読書活動体験、読み聞かせを受けた体験が多い子どもの方がいずれの体験も少ない子どもに比べて学校生活スキルが高い傾向が示された。そして、現在の子どもの興味・関心のある本のジャンルは、絵本、児童文学、マンガ、小説が多かった。これらのことから、小学校においては、読書活動を継続するとともに、子ども達の関心のあるジャンルをふまえた学校図書館づくりが大切だと考えられた。

キーワード：学校生活スキル、読書活動、小学生、学校図書館

※1 岡山大学大学院社会文化科学研究科大学院生

※2 岡山大学大学院社会文化科学研究科

I はじめに

文部科学省の平成30年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(2019)によると、小・中・高等学校における、暴力行為の発生件数は72,940件(前年度63,325件)であり、児童生徒1,000人当たりの発生件数は5.5件(前年度4.8件)である。また、小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は543,933件(前年度414,378件)と、前年度より129,555件増加しており、児童生徒1,000人当たりの認知件数は40.9件(前年度30.9件)である。

児童生徒の問題傾向の増加の背景として、児童生徒のもつ社会的スキルなど、日常生活の中で求められるスキルの低下が原因の1つとして挙げられている。こうしたスキルの低下は、現在の適応状態や今後の問題傾向と結びつくことが指摘されている(山口・飯田・石隈, 2005)。児童生徒にとって、日常生活の一部である学校生活において必要とされるスキルを向上させることは、問題傾向の増加の抑制に対して、重要であると考えられる。

飯田・石隈(2002)によると、学校生活スキルとは「一人の個人として成長していく中で出会う発達課題と学校生活を送る上で出会うことが予測される教育課題に対処する際に役立つスキル」であり、「学習される、学習面、社会面、進路面、健康面の領域で、中学生が抱える発達課題・教育課題の解決を促進す

る、学校適応において個人の目標達成に有効である、学校という場面で受容される、学校で教育できる行動」とされている。具体的には、進路決定スキル、集団活動スキル、自己学習スキル、課題遂行スキル、健康相談スキル、コミュニケーションスキル、健康維持スキルが挙げられている（山口他，2005）。

ところで、曾和（2017）は、子どもにとっての絵本とその読み聞かせとは何かについて言及しており、絵本の読み聞かせの方法論の意味内容について考察をしている。その中で、絵本の読み聞かせは、絵本を仲立ちにして、読み手である保育者と読んでもらう子どもの心の通いあいにあたるコミュニケーションを大切にすることである、と述べている。また、読み聞かせは、保育者と子どもとが一对一の場合もあれば、子どもが集団で絵本の絵を読んだり保育者から話を聞いたりする場合もあり、どちらの場合も、子どもたちが楽しんだり感動を分かち合ったりすることができる、と述べている。このことから、読み聞かせにより、コミュニケーションスキルや集団活動スキルに関連する可能性が考えられる。

読書の効果について、デュアー（2013）は、読書が学力や読解力に影響を及ぼすことは明らかであり、読書で得た語彙により、本から読み取った感情の理解と疑似体験とが組み合わさって、文章を理解する力につながっていると述べている。そして、本は子どもの生活空間を大幅に広げ、日常生活の中で出会えない違う時代と場所の人や体験に触れることができ、この体験は疑似体験であっても、実体験同様に子どもの社会性や感情的発達に寄与することが明らかにされている（デュアー，2013）。また、読書活動には、成人において意識・意欲・行動にプラス方向の影響を与えていること、中学生において、科学読み物の読書が、自然に関する興味・関心を高めると同時に、理科への学習意欲を高め、論理的思考力や思考の柔軟性、将来展望の向上に効果をもたらすというところが明らかにされていた（濱田・秋田・藤森・八木，2016；脇野・角谷，2018）。

以上から、読書活動体験や読み聞かせを受けた体験は学校生活スキルに何らかの関連があることが推察された。もし、読書活動体験や読み聞かせを受けた体験が学校生活スキルに効果をもたらすのであれば、学校で読書活動の機会を設ける必要があるのではないかと考えられた。

本研究では、小学生の読書活動と学校生活スキルとの関係に着目し、小学校高学年の乳幼児期・児童期の読書活動体験と読み聞かせ体験と、子どもの学校生活スキルの関連について検討することを目的とする。そして、乳幼児期・児童期の読書活動体験や読み聞かせ体験が多いほど、子どもの学校生活スキルは高いだろうという仮説を立てた。また、現在の子どもたちがどのようなジャンルの本に興味・関心があるのかを知ることは、今後の学校図書において新たな知見を得られるのではないかと考えられたため、好きな印象に残る本について調査することにより、実態を知ることにも目的とした。

II 方法

1 協力者

公立小学校 3 校の本研究の担当教師は無記名の自己記入式質問紙調査を依頼し許可を得た。そして、担当教師から対象学級の担任教師に調査に関する説明を行い、各学級の担任教師から児童に調査に関する説明を行うことにより、協力を依頼した。5 年生・6 年生の小学生 728 名に調査票を配布し、回収できた 683 名うち、性別のない人、未回答や重複回答がある 76 名を除いた 607 名（男子 327 名，女子 280 名）を分析対象者とした。倫理的配慮については、個人情報保護、学術学会や卒業論文および学術論文で発表すること以外でデータを使用することはなく他に回答が漏れることはないこと、研究への参加は任意であり、参加を辞退したり、途中でやめる権利を有すること、授業の成績とは関係がないこと、研究に参加してもしなくても不利益な対応を受けないことを担当教師から担任教師、担任教師から児童へ十分に説明し、調査票の表紙にも記載をした。

2 質問紙構成

学年、学級、性別のプロフィールについて回答を求め、以下のような尺度を使用した。

学校生活スキル尺度（山口他，2005）：作者から許可を得て用い、一部の質問を意図が変わらぬ程度に調査協力校の実態に合わせ、言い換えて使用した。小学生が学校生活を送る上で出会う発達課題・教育課題の解決を促進するスキル（以下、学校生活スキル）の個人差を測定するもので、下位尺度のうち、信頼性と妥当性を考慮し、健康相談スキルと健康維持スキルを除く 5 つの下位尺度（進路決定スキル、集団活動スキル、自己学習スキル、課題遂行スキル、コミュニケーションスキル）36 項目を使用し、4 件法で回答を求めた。

これまでの読書活動に関する項目（濱田他，2016）：子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響について検討するために作成された子どもの頃の読書行動に関する尺度である。作者の許可を得て、読書量尺度 1 項目、読書に関する周囲からの直接的な関わりの 1 項目を参考に作成した。読書量は、「就学前（小学校に入学する前）」「小学校 低学年（1，2 年生）」「小学校 中学年（3，4 年生）」「小学校 高学年（5，6 年生）」の 4 段階で、それぞれ 5 件法で回答を求めた。また、読書に関する周囲からの直接的な関わりは、「就学前（小学校に入学する前）」「小学校 低学年（1，2 年生）」「小学校 中学年（3，4 年生）」「小学校 高学年（5，6 年生）」の 4 段階で、それぞれ 3 件法で回答を求めた。また、本の名前については、「『好きな本』または『忘れられない本』はありますか」という項目に「はい」か「いいえ」で答えてもらい、「はい」と答えた人へのみ、本の名前を求めた。

3 分析方法

（1）読書活動体験および読み聞かせ体験と学校生活スキルの関連の検討

読書活動体験と読み聞かせを受けた体験について、それぞれ平均を算出し、平均以上の得点を高群、平均より少ない得点を低群に分け、「読書活動体験低・

読み聞かせを受けた体験低」群(読低・聞低群),「読書活動体験低・読み聞かせを受けた体験高」群(読低・聞高群),「読書活動体験高・読み聞かせを受けた体験低」群(読高・聞低群),「読書活動体験高・読み聞かせを受けた体験高」群(読高・聞高群)の4群を用いて分析を行った。

IBM SPSS Statistics23を使用し,学校生活スキルの各スキルを従属変数,読書活動体験・読み聞かせを受けた体験を固定因子とし,一要因分散分析を用いて検討した。統計的有意水準は,5%とした。

(2) 児童の興味関心のあるジャンルの実態についての検討

KJ法(川喜田,1967,1970)を用いて分類し,分析をした。信頼性と妥当性を高めるため,文学部の心理学・社会心理学分野の学生5名,教育学部の教育心理学専修の学生2名,指導教員の計8名で分類を行った。

III 結果

1 使用尺度の因子分析および信頼性

(1) 学校生活スキル尺度

山口ら(2005)の因子構造で α 係数を算出した結果,高値で保たれていたことから,山口ら(2005)の因子分析の結果を用いた。下位因子ごとにCronbachの α 係数を算出した結果,「進路決定スキル」は.85,「集団活動スキル」は.79,「自己学習スキル」は.77,「課題遂行スキル」は.77,「コミュニケーションスキル」は.70であった。

(2) 読書活動に関する項目

それぞれの質問項目について,Cronbachの α 係数を算出した結果,「これまでの読書量」は.73,「読書へのかかわり」は.75であった。

2 読書活動体験および読み聞かせと小学校高学年の学校生活スキルの関連

学校生活スキルの各スキルを従属変数,読書活動体験・読み聞かせを受けた体験を固定因子とし,一要因分散分析を用いて検討した結果,いずれのスキルも有意な差が見られた($p<.001$)。

次に,Tukey HSDを用いて,多重比較を行った結果,以下のことが示された(図1)。進路決定スキルは,「読高・聞高群」が「読低・聞高群」と「読低・聞低群」よりも有意に高かった($p<.001$)。また,「読高・聞低群」は「読低・聞低群」よりも有意に高く($p<.001$),「読低・聞高群」も「読低・聞低群」よりも有意に高かった($p<.01$)。集団活動スキルは,「読高・聞高群」が「読低・聞低群」よりも有意に高く($p<.001$),「読低・聞高群」よりも有意に高かった($p<.05$)。また,「読高・聞低群」は「読低・聞低群」よりも有意に高く($p<.001$),「読低・聞高群」も「読低・聞低群」よりも有意に高かった($p<.01$)。自己学習スキルは,「読高・聞高群」が「読低・聞低群」よりも有意に高く($p<.001$),「読低・聞高群」よりも有意に高かった($p<.01$)。また,「読高・聞低群」と「読低・聞

高群」は「読低・聞低群」よりも有意に高かった ($p < .001$)。課題遂行スキルは、「読高・聞高群」が「読低・聞低群」よりも有意に高かった ($p < .001$)。また、「読高・聞低群」と「読低・聞高群」も「読低・聞低群」よりも有意に高かった ($p < .05$)。コミュニケーションスキルは、「読高・聞高群」が「読低・聞低群」よりも有意に高く ($p < .001$)、「読低・聞高群」よりも有意に高かった ($p < .05$)。また、「読高・聞低群」と「読低・聞高群」も「読低・聞低群」よりも有意に高かった ($p < .001$)。

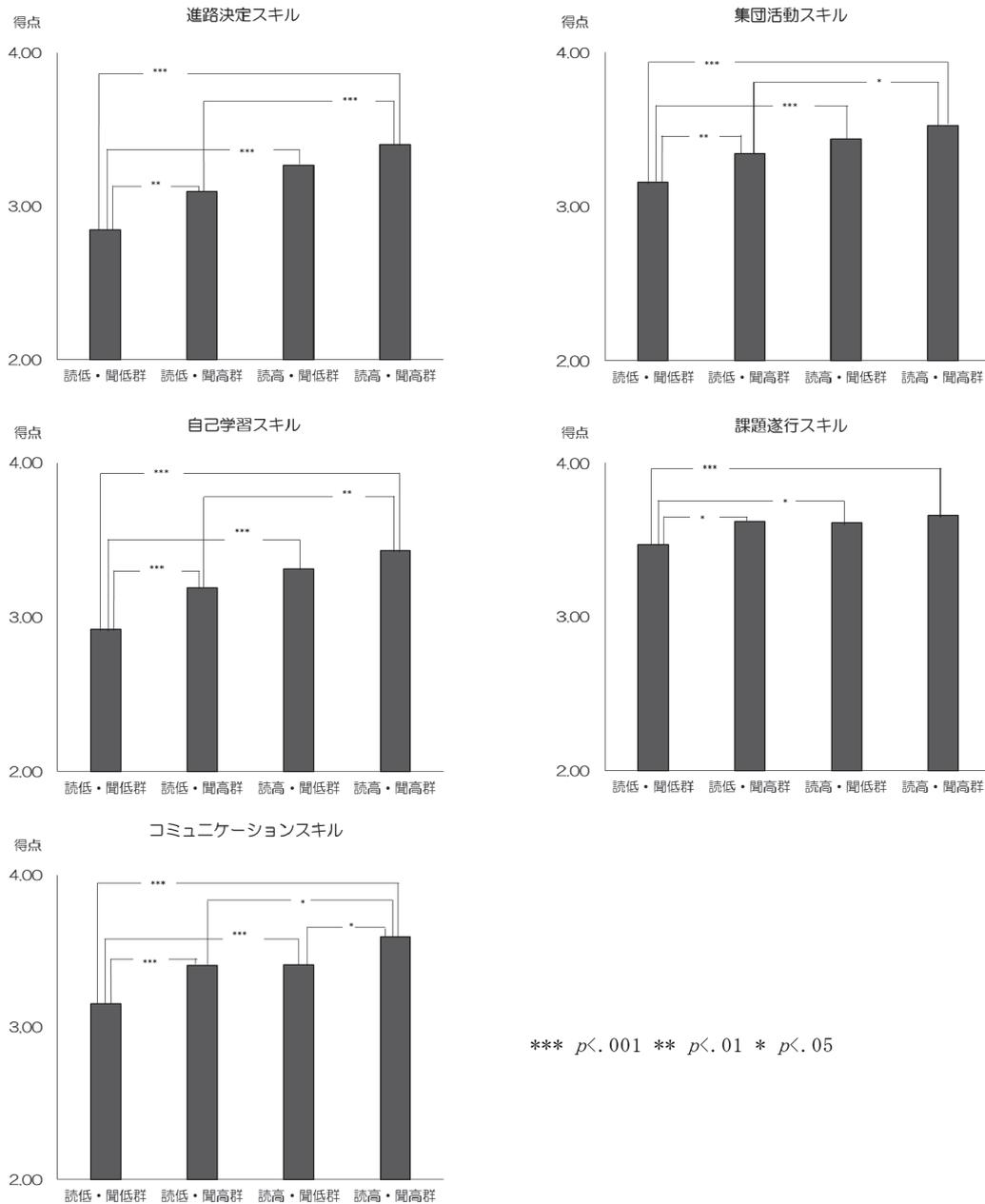


図 1 多重比較の結果についてまとめた図

3 児童の好きな印象に残る本の実態について

KJ法（川喜田，1967，1970）を用いて，児童の好きな印象に残る本のジャンルを分類し，実態を分析した（表1，2）。

絵が主軸で，文章量が少ないものを「絵本」，児童文学に比べると絵が多いが，言葉に主軸があるものを「幼年童話」，児童向けで言葉が主軸で，絵が少ないものを「児童文学」に分類した。また，児童向けに書かれた科学的な内容のものを「科学児童書」，料理に関係する内容が書かれているものを「料理」，鉄道に関するものや，会社に関する内容のものは「社会」，動物・生物についての図鑑は「動物図鑑」，野球やスポーツ選手に関する内容のものは「スポーツ」，心の持ち方など，自身を向上させるようなものを「自己啓発」，歴史人物の伝記や歴史について書かれているものを「伝記，歴史」，ゲームの攻略のためのものを「攻略本」と分類した。さらに，絵を動的に描いて話を進めていき，登場人物の台詞や音を文字化し，これらをコマや吹き出しに入れて表現したものを「マンガ」と分類し，サブカテゴリとして，女性を対象としたものを「少女マンガ」，男性を対象としたものを「少年マンガ」，どちらも対象としたものを「一般マンガ」とした。そして，一般向けに書かれており，ある程度の長さのあるものを「小説」に分類し，サブカテゴリを，「医療」，「アドベンチャー」，「短編」，「教訓」，「戦争」，「ファンタジー」，「外国文学」，「ノベライズ」，「学園物」，「日常系」，「ノンフィクション」，「ライトノベル」，「ミステリー」，「動物小説」，「シリーズ本」，「ホラー」とした。

その結果，カテゴリにおいて，50名以上が書いていたのは，小説（173），マンガ（86），絵本（53），児童文学（52）であった。また，サブカテゴリにおいては，45名以上が「少年マンガ」を書いていたことが分かった。これらのことから，現在の小学生が興味・関心のある本の多くが，小説，マンガ，絵本，児童文学であり，また，マンガの中では，少年マンガが多く読まれているといえる。

表1 KJ法によるジャンルの分類結果（小説・マンガ）

カテゴリ		サブカテゴリ	
小説	173	外国文学	21
		動物小説	20
		学園物	18
		ホラー	17
		ライトノベル	16
		アドベンチャー	15
		ノベライズ	14
		シリーズ本	14
		短編	11
		日常系	11
		ノンフィクション	10
		ファンタジー	8
		ミステリー	7
		教訓	7
戦争	2		
医療	1		
マンガ	86	少年マンガ	47
		少女マンガ	29
		一般マンガ	25

数字は、人数を表す。

表2 KJ法によるジャンルの分類結果（小説・マンガを除く）

カテゴリ		カテゴリ	
絵本	53	動物図鑑	13
児童文学	52	社会	9
幼年童話	39	自己啓発	9
伝記・歴史	37	料理	5
科学児童書	18	攻略本	1
スポーツ	15		

数字は、人数を表す。

IV 考察

本研究の目的は、読書活動体験と読み聞かせ体験と、子どもの学校生活スキルの関連について検討すること、興味・関心のあるジャンルについて実態を知ることであった。まず、学校生活スキルとの関連について検討していく。結果から、いずれのスキルにおいても、読書活動体験と読み聞かせを受けた体験の両方が少ない子どもよりも、読書活動体験と読み聞かせを受けた体験の両方、もしくは、どちらか一方が多い子どもの方が学校スキルをもっている傾向が示された。また、進路決定スキル、集団活動スキル、自己学習スキル、コミュニケーションスキルは、読み聞かせを受けた体験に加え、読書活動体験が多い方がスキルが高い傾向が示された。これは、読書活動体験が多いほど、本から得られることが多く、自分の生活と結び付けて考えることができたり、デュアー（2013）が述べるように、読書による疑似的な体験であっても社会性などに寄与しているためであると考えられる。また、曾和（2017）が述べるように、読み聞かせは、子どもたち一人ひとりが楽しんだり感動を分かち合ったりことができ、子どもと保護者の間や、子ども同士の間でコミュニケーションが生まれることから、読書に関する周囲からの関わりが多いほど、学校生活スキルが高い傾向が見られたと考えられた。

読書活動について、腰越（2018）によると、中学生や高校生では、一時間以上の読書をする層（相対的多読層）において、PCや携帯、スマホ、タブレットの使用が認められていることが確認できており、紙媒体の書籍に留まらない、デジタル機器を用いた読書活動がなされ始め、浸透していることが明らかにされている。今後は、中学生や高校生に限らず、小学生においても紙媒体に限らない読書がますます拡大していくことが考えられる。一方で、デジタル機器は娯楽を目的として使用されることも多い。腰越（2018）は、家族の文化環境が、読書量にプラスの影響を及ぼすことを示唆しており、非認知能力を親や周囲の環境などから涵養されることが、子どもには大切ではないか、と述べている。学校において行うことができる活動として、子ども同士で本を紹介し合うという活動や、保護者やボランティアによる本の読み聞かせの時間を設けている学校があると思われるがそうした活動は、子どもたちの興味・関心の幅を広げる機会になり進路決定スキル、集団活動スキル、自己学習スキル、課題遂行スキルを向上に寄与するとともに、コミュニケーションの場となることから、コミュニケーションスキルの向上に寄与すると考えられる。

また、現在の子どものがどのような本に興味・関心をもっているのかを KJ 法（川喜田，1967，1970）により検討したところ、絵本、児童文学、マンガ、小説が多かった。絵本については、幼いころから読み聞かせなどで触れ合うことが多く、小学校でも読み聞かせで使用されることがあるため、好きな本や忘れられない本として選択した子どもが多かった可能性が考えられる。また、児童文学については、子どもの発達段階から考えると、発達するにつれて絵本から幼年童話、幼年童話から児童文学へと移行すると考えられる。今回の調査では、小学生 5、6 年を対象に調査を行ったため、幼年童話から児童文学の本に移行

し、小学生3,4年生と比較すると児童文学の本を読む数も増えているため、児童文学が多かったと考えられる。小学生5,6年を対象に調査を行ったが、米川(2013)によると、児童文学が約6歳~13歳ごろまでを対象としていることから、小説については、読む子どもが増えているため、多いのではないかと考えられる。学校の図書室の本を購入していく際に、このような実態があることも役立つのではないと思われる。

マンガについて、今回の分類では、一般マンガ、少年マンガ、少女マンガが分類されたことから、娯楽を目的として読まれており、また、分かりやすい、面白いなどの印象を読み手に与えることができ、親しみやすさもあるため、多くの子どもが読んでいることが考えられる。マンガは、子どもから大人まで幅広く受け入れられる表現メディアとなっており、多くは娯楽を目的としたものであるが、学習を目的とした学習マンガも多く存在しているため、今後検討していく必要があるかもしれない。

<付記>

本研究は、2018年度岡山大学教育学部に提出した卒業論文の一部を加筆修正したものです。本研究にご協力いただきました協力者の皆様、研究をまとめるにあたり貴重なコメントをいただきました当時の教育心理学専修の先生方に感謝いたします。

参考・引用文献

- アンドリュー・デュアー(2013). 読書が子どもの発達に及ぼす影響 東海学院大学紀要7, 261-267
- 濱田秀行・秋田喜代美・藤森裕治・八木雄一郎(2016). 子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響—世代間差に注目して— 読書科学58(1), 29-39
- 飯田順子・石隈利紀(2002). 中学生の学校生活スキルに関する研究学校生活スキル尺度(中学生版)の開発 教育心理学研究50, 225-236
- 川喜田二郎(1967). 発想法—創造性開発のために 中公新書
- 川喜田二郎(1970). 続・発想法—KJ法の展開と応用 中公新書
- 腰越滋(2018). データからみた現代の子どもの読書傾向—読書^{メディア}媒体の広がりに着目して— 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系69(1), 55-68
- 文部科学省(2019). 平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について. <https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>(2020年2月20日取得)
- 曾和信一(2017). 絵本の読み聞かせについての一考察 四條畷学園短期大学紀要50, 1-8
- 脇野信吾・角谷詩織(2018). 中学生が科学読み物に触れることの意義: 理科や読書への意欲と思考力・将来展望との関連から 上越教育大学研究紀要

38(1), 55-64

山口豊一・飯田順子・石隈利紀(2005). 小学生の学校生活スキルに関する研究
—学校生活スキル尺度(小学生版)の開発— 学校心理学研究 5, 49-58

米川泉子(2013). 絵本と児童文学のはざまにある幼年童話を考える 聖霊女子
短期大学紀要 41, 81-91

A study on the association between reading activities and life skills at school
among elementary school children

Natsumi MURAKAMI*1, Mikayo ANDO*2

The increase in problem behaviors among school children is related to the decline in their life skills. The purpose of this study is to clarify the association among elementary school children between their experience of reading books and listening to stories and their life skills at school. Through this study, we also analyze the necessity of reading activities in school. 728 5th and 6th graders conducted self-reporting questionnaires. The results show that the students who had more experience of reading books or of listening to stories show better life skills at school compared to students who had less experience of reading books and listening to stories. The students showed an interest in genres such as picture books, children's books, manga, and novels for children. It may be important to continue reading activities in school. It is also important to arrange a school library from the perspective of which genres children are interested in.

Keywords: school-life skills, reading activities, elementary school children,
school library

*1 Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University (Master's Course)

*2 Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University
